「書くこと」領域における授業実践例

① 学年・単元名　　第４学年「新聞を作ろう」

② 単元で取り上げる言語活動

保護者に学校の様子（係・学習・委員会・休み時間・給食・校舎など）について、伝えたいことの優先順位を決めて割り付けをした学級新聞を、グループで作成し発行する。（関連：思Ｂ（２）ア）

③ 指導の工夫

（ア） 外部講師（中日新聞社 NIE 事務局員）による、「見出し」の考え方の授業の実施（図１）

（イ） グループで持ち寄った記事を合わせた新聞の作成

（ウ） ICT（ロイロノート・スクール）を利用した、見出しクイズや伝え合う場の位置付け（図２）

（エ） 起案書を利用した校閲と修正

（オ） 学びを自分の言葉で表現する「振り返りカード」の利用（図３）

④ 活用したツール

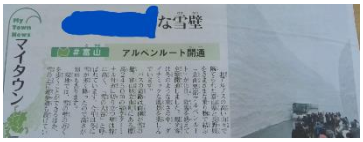
「ロイロノート・スクール」を利用した。「ロイロノート・スクール」とは、文字、動画、写真、インターネット上の情報を記載した“カード”を直感的な操作で作成ができるアプリケーション。作成したカードは、ロイロノート・スクール内でつながっている端末で共有でき、発表したい順に指でなぞるだけで簡単に視覚的なプレゼンを行うことが可能。注目させたい部分をポインター機能でカード内の一部を強調させた。また、見出しクイズをする場面では、タブレット画面を大型テレビに投影し（図４）、注目ができるようにした。その際に制限をかけることでメリハリをつけた。グループで活動中の制限はなく、自由に操作しながら、新聞づくりに取り組めるようにした。

「図１　NIE 講師の授業」

⑤　本実践の展開から終末にかけて

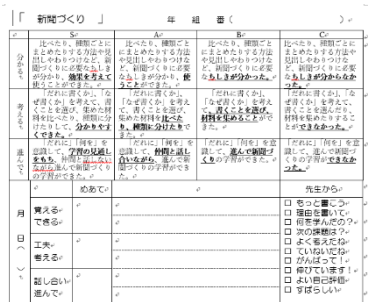
本時では、教師が作成した「虫食い見出しクイズ」を解き、記事のキーワードを見出しにしていることに気付けるようにした。また、その学びを生かして、自分たちでもクイズを作って答え合う活動を位置付けた。終末には「振り返りカード」に学んだことを記入し、すぐにフィードバックできるように、コメントをチェック形式にした。優れた記述には☆を付け、次時の始めに読むようにした。読むことで、学びを想起したり、書き方を学んだりできるようにした。

「図２　ICT の利用」



「児童が作成したクイズ（一部）」

展開（二十九分）	○個人追究：見出しクイズの○○に入る言葉を考える。 ［見出しクイズの発表方法］ ①記事から見出しの虫食いを作る。 ②記事の内容を簡単に説明する。 ③虫食い部分にはどんな言葉が入るでしょう」と問いかけ、クイズをする。 ○全体交流で虫食い見出しクイズを解き、表現方法や着目することを見出す。 ・短くて、内容が分かるのがいいと思う。 ・誰が、何をしたが入っているのも分かりやすいと思う。 ・記事のキーワードになる部分を使うといいと思う。 ・答えは「○○○」です。□□□という理由で○○○にしました。	・児童が興味をもちそうな記事を準備しておく。 ・発表の方法が理解できていない児童には、タブレットや掲示で方法を確認するように助言する。 ・クイズが作れた児童から提出箱に入れるように指示する。 ・意見に理由をつけて話すように確認した後に発言にうつる。理由がない児童には、「この言葉を入れようと思ったのはなぜか。」と問いかける。 ・記事にある言葉、短くする、5W1H、写真をヒントに考えることに気付けるように板書に書く。
終末（十分）	見出しは、リード文や記事の「キーワード」を短くしたり、「誰が」「何を」「いつ」「どうした」「どのように」を2つ以上入れて10字くらいで書いたりすると分かりやすい。 ○「学んだことカード」に今日の振り返りを記入する。 ○次時に、以前書いた自分の記事の見出しを考えることを確認する。	・書き始められない児童には、課題を確認させ、その答えになるように書くように助言したり、「見出しは……」と文頭を示したりする。 ■［思考・判断・表現②］記述・観察 ・魅力的な見出しにするためには、リード文や本文、5W1H に着目して考えることが分かり、自分の記事の見出しを考えようとすることができる。



「図３　振り返りカード」

⑥　実践するときの留意点

外部講師の活用や、社会科見学後の新聞づくりなど「生かす場面」を具体的にイメージして、カリキュラムマネジメントを行うことが重要。起案書で校閲するなど、真剣に学ぶ場を位置付け、責任をもった活動につなぐこと。記事の内容に必ず触れて、国語としての学びを確保したい。

「図４　見出しクイズの様子」